

An aerial photograph of a coastal city and harbor, likely in Japan. The image shows a dense urban area in the foreground, a large harbor with several islands and piers in the middle ground, and a blue sky with light clouds in the background. The text is overlaid in the center of the image.

鈴木商店の軌跡に学ぶ  
～現代へのメッセージ～

# ■ 本日の内容

## ■ 鈴木商店とは

## ■ 連載「遙かな海路

～巨大商社・鈴木商店が残したもの」について

## ■ 鈴木商店は今も「存在」していた！

## ■ 鈴木商店が残したもの

- ・地域遺産
- ・事業、人材
- ・精神、DNA
- ・教訓

神戸新聞社経済部

小林由佳 2017年5月20日

## ■ 鈴木商店とは

神戸を拠点に、明治、大正期に急成長し、昭和金融恐慌で破綻した。ピーク時には傘下に60社以上の企業。城山三郎の小説「鼠」、玉岡かおる「お家さん」のモデル

1874(明治7)年 初代鈴木岩治郎が創業

1886(明治19)年 金子直吉が20歳で入店

1894(明治27)年 岩治郎が急死。「お家さん」鈴木よねが  
番頭の金子らに経営を任せる



1900(明治33)年 樟脳事業で台湾に進出。以降、製糖、製粉、造船、セルロイド、製鉄など事業を多角化  
1917(大正6)年 三井物産を抜いて日本一の商社に





# 連載「遙かな海路」

## 神戸港開港150年を機に、鈴木商店の波乱の歴史から教訓を探る

### 遙かな海路

巨大商社・鈴木商店が残したもの

「鈴木商店の実力者として幾多の困難を克服し神戸に一大総合商社を育てて、貿易・海運・重化学工業界に数多くの輝かしい業績を残されました」

1907年5月15日、神戸中央区の市立中央体育館で開かれた神戸港開港100年の祝賀式。約5千人が埋め尽くす会場で、原口忠郎神戸市長が港灣功労者を顕彰した。実業家五代友厚らとともに、鈴木商店の番頭金子直吉の姿があった。鈴木商店の破綻から40年。金が鬼籍に入ってから20年余が過ぎている。

土佐（高知）出身の金子が鈴木商店に入ったのは1886（明治19）年、20歳のとき。創業者の鈴木岩治郎は砂糖引取（輸入・商）として業績を伸ばしたが、94（同27）年に急逝。妻の鈴木よねは女店主「お家さん」となり、番頭の金子・柳田富士松に経営を任せる決断をした。

よねの信頼を意に感した金子。このときから代々の傑物といわれた本領を発揮する。

#### 始まりは開港

神戸港は1868年1月1日に開港した。外国人居留地では、今も街路に名が残るハンター、六甲山を開いたグループから外国人が活躍。新産業が生まれ、全国から続々と人が集まった。鈴木岩治郎もそんな一人だった。開港間もない7年（明治1）年、長崎で菓子職人の修業の後、神戸・弁天浜で砂糖問屋を開業した。数年後、薩摩（鹿児島）出身の川崎正蔵・川崎兵庫造船所・現川崎重工神戸工場を開いた。明治半ば以降、紡績、マッチなど軽工業が栄え、神戸は横浜と並ぶ一大貿易港となる。

鐘淵紡績（旧カネボウ）が兵庫区に進出し、一大紡績会社に発展。総合商社・兼松の前身となる倉島商や、日本の代表的なマッチ会社清光が創業した。やがて、川崎造船所の後継社長として明治の元勳・松方正義の三男松方幸次郎がやってくる。後に幸と盟友と

### プロローグ 波乱の軌跡とその時代

なり、近代日本を神戸から動かす。

#### 大戦景気で急成長

鈴木商店は日清戦争後、飛躍のチャンスをつかんだ。セルロイドの原料となる樟腦の一大産地台湾に目を付けた金子が、台湾警備府民政官の後藤新太郎と密に樟腦油販賣権を獲得した。

1906年に出版された「松方・金子物語」によれば、川崎造船所の社長になる前に新聞社にいた松方幸次郎が社説「台湾の開発を論ず」を書き、それを読んだ金子が台湾進出を思いついたという。

その本の巻頭には鈴木商店ロンドン支店を務め、後任日商（現双日）会長となつた高畑誠一が序文を書いている。「人は神戸の生んだ偉大な事業家を幸も大であり、明治末期、大正時代、世界を股にかけて雄飛せん」と

たしても一致する

金子の事業欲はどまるところを知らなかった。樟腦からセルロイドや人造絹糸の製造へ進みだす。さらに製糖、製鉄、造船と拡大路線をひた走った。第1次世界大戦時には伝説を生んだ。物資高騰を測した金子が「まっ

しへの前進せよ」と鉄船、小売を一大買い占めた。手廻りの中し、巨額利益を得た。大戦最後の17（天正6）年、三井の財閥を凌ぎ、日本最大の財閥に。売上高は国民総生産の10%に達した。又エエ運河を通過する船舶の積み荷の1割を占めたといわれ、名実ともに世界の大手に成長した。

#### 焼き打ち、破綻へ

絶頂期にあった18（同7）年、富山から飛び火した騒動で、この買い占め疑惑が広がり、本店焼き打ち騒ぎ。後年、作家の城山三郎が焼き打ち事件を題材にした小説「嵐」で真相を追及した。買い占めは隠蔽したと結論づけ、ようやく汚名が晴らされた。

経営の潮目が変わったのは第1次大戦後の反動不況だった。船舶や小麦の相場が暴落、巨額の借入金による拡大路線が裏目に出て資金繰りが悪化した。金融恐慌のあおりでメンパシだった日商銀行の台湾銀行が融資をストップし、27（昭和2）年4月に破綻した。

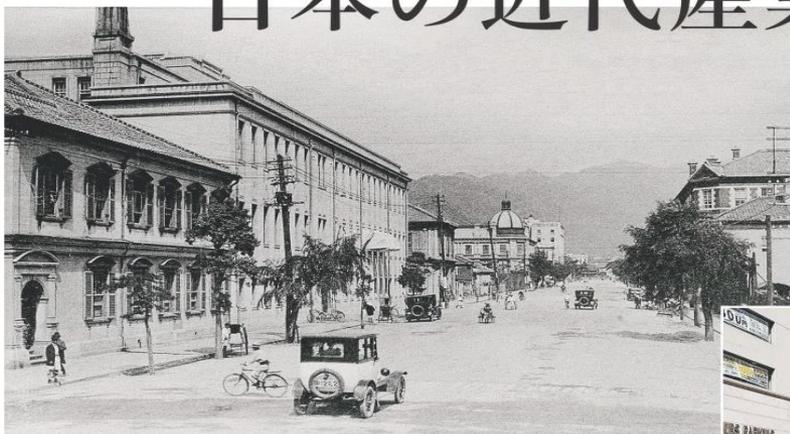
日本最大の商社が幻と消えた。だが、日商を設立した高畑誠一や永井幸太郎、神戸製鋼所の生みの親といわれる田島石右衛門、帝人社長の大原晋三ら政財界に人材を輩出した。先駆的に取り組んだ事業の数々も今に残る。

「鈴木商店は日本が必要とする産業を育んだ。神戸大の加藤忠男名誉教授68はこう指摘する。「金子は志走った。だがブレブレを踏む責、つまり、それは人動定する人間がいなかったことが不幸だった」

◆ 敬称略  
（村）上卓白合  
（次回10日掲載）

この連載は鈴木岩治郎の親戚会「会」に取材協力。一部写真の提供を受けています。

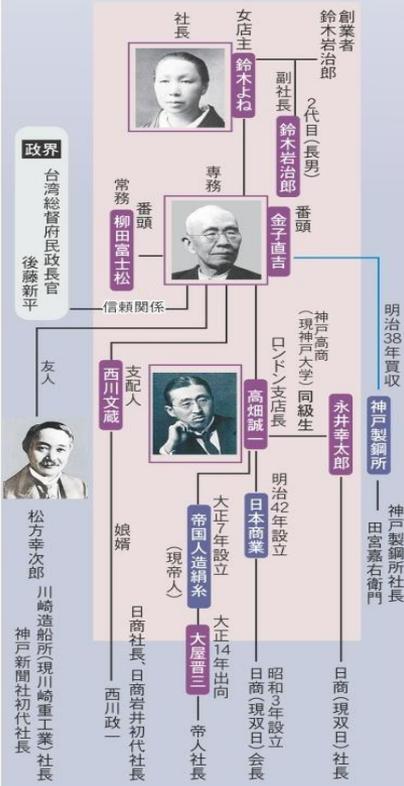
## 日本の近代産業 礎築く



●昭和初期ごろの京町筋の様子。左端が鈴木商店本店。その奥は横浜正金銀行（現神戸市立博物館）＝神戸市文書館提供 ●現在の京町筋。左の立体駐車場が鈴木商店の本店跡＝神戸市中央区海岸通（撮影・田中靖浩）



### 鈴木商店の関係者たち



# ■鈴木商店は今も「存在」していた！

鈴木よねのひ孫に当たる、太陽鋳工社長の鈴木一誠  
(かずのぶ)さんに話を聞くと・・・



# ■ 鈴木商店が残したものの①

□ 地域遺産 神戸、台湾、九州、山形、北海道、高知など

【足跡を訪ねて神戸編】



## ■鈴木商店が残したもの②

### 企業

神戸製鋼所  
双日  
IHI  
サッポロビール  
帝人  
ダイセル  
昭和シェル石油  
鈴木薄荷  
ニッカウキスキー  
太陽鋳工  
大日本明治製糖  
ニチリン

### 人材

高畑誠一(日商会長)  
永井幸太郎(日商社長、貿易庁長官)  
西川政一(日商社長、日商岩井社長、  
日本バレーボール協会会長)  
田宮嘉右衛門(神戸製鋼所社長)  
大屋晋三(帝人社長)  
賀集益蔵(三菱レイヨン社長)  
北村徳太郎(播磨造船所課長などを  
経て大蔵大臣)



# ■鈴木商店が残したものの③

## ➤精神、DNA

### 「煙突男」といわれた金子直吉

- ・「生産こそ最も尊い活動」⇒国益重視 国のために事業を興す
- ・リスクを取ってチャレンジする 開拓者精神

佐藤廣士・神鋼相談役「平気だよその領域に出て行って新しいものをつくる。商社の遺伝子」

鈴木純・帝人社長「新しいものや技術にチャレンジし続けるのが創業以来の精神」

朝倉次郎・川崎汽船会長「『われ先汽船』と呼ばれてきた。普通のことをやっていたはだめだという気概でやってきた」